

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
いのち輝く 鹿島っ子の育成 ～元気で勉強 仲よく 楽しい学校～	①学力向上 ②いじめ防止 ③特別支援教育の充実 ④危機管理

A: ほぼ達成できた
B: 概ね達成できた
C: やや不十分である
D: 不十分である

3 目標・評価
① 笑顔であいさつ、元気いっぱい活動する子どもの育成

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体づくり	・望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成 ・運動習慣の改善や定着化	・養護教諭、栄養教諭と連携し、健康教育、食育を進め、朝食の喫食率90%以上を目指す。 ・運動の楽しさを実感させるとともに、体力向上の意識を育てる。	・毎日の健康観察、時季に応じた健康管理の指導。 ・食育の重要性に関して、子どもたちの意識を高める。 ・体育行事を充実させ、年間を通じた体力向上を進める。 ・各学年でスポーツチャレンジ等に取り組み、運動の楽しさを味わわせ意識の向上を図る。	B	・毎日の健康観察、早寝・早起き・朝ごはんの呼びかけで、規則正しい生活を送ることができる児童が増えた。生活リズム見直し週間では、毎日の生活と朝ごはんについて振り返りができ、朝食喫食率は93%となった。 ・体育行事を精選し、学校全体で計画的に取り組むことができた。スポーツチャレンジにも意欲的に取り組み運動の楽しさに触れることができた。 ・保護者アンケート「心と体の健康教育」85%	・児童が主体的に健康管理ができるよう委員会を中心に働きかけるとともに保護者に睡眠や朝食摂取の重要性について啓発していく。 ・体育行事については、今年度の反省を活かし、児童がさらに主体的に運動を楽しむことができるような取組を工夫する。
教育活動	●志を高める教育	・目標達成に向けて努力しようとする態度の育成	・「一貫実行」に進んで取り組むことができる児童を80%以上にする。	・1年間通して取り組みたいことを全児童に決めさせ、教室に掲示することで、意識の継続化を図る。 ・「一貫実行」を振り返る時間や場面を設定し、児童自身や教師による評価を行うことで、意識化させる。	C	・カレンダー一式振り返りカードを使用することで、80%の児童が毎日振り返りを行うことができた。そのことにより、自分の一貫実行のめあてを意識することができた。 ・学期末に各学級1名、取組の紹介放送を行ったが、今後は児童同士が互いの取組に対して励まし合えるような環境を作っていく必要がある。 ・チェックするだけの取組になっている児童もいる。児童に継続する良さを感じさせる方策を考える必要がある。	・児童が続けることの良さを感じられるようにするためには、教師の日々の声かけだけでなく家庭の協力も仰ぐことができたかと考える。学校便りや学級通信等で一時実行の取組を家庭と共有し、啓発を図っていく。 ・一貫実行を取り扱う際に、児童自身が自分で続けられるめあてを決めさせる必要がある。
学校運営	○安全安心な学校	・危機管理意識の高揚 ・事故防止と危険回避能力の育成	・危機管理マニュアルの周知徹底を図る。 ・施設設備や教育活動の安全性のチェックを定期的に実施する。 ・教職員の交通事故0をめざす。 ・訓練等を通して、児童に危機回避能力を身に付けさせる。	【児童】 ・避難訓練や交通安全教室を開催し、不審者等への対応など生活指導を強化する。 ・防犯ボランティア、警察署、交通指導員等との連携を強化する。 ・2ヶ月に1度「運転チェックシート」を配布し各教職員の日頃の運転状況を確認させる。 ・4月の職員会議で「飲酒運転撲滅実践計画」を読み上げ、共通理解を図る。 【職員】 ・2ヶ月に1度「運転チェックシート」を配布し各教職員の日頃の運転状況を確認させる。 ・4月の職員会議で「飲酒運転撲滅実践計画」を読み上げ、共通理解を図る。	B	・各学期の避難訓練に加えて不審者対応の職員研修会や津波対応の避難訓練を実施した結果、児童に危機回避能力を身に付けさせたり教職員間で危機管理マニュアルを共通理解したりすることができた。 ・各学期の集団下校を実施したり登校状況の自己評価をさせたりした結果、各班の意識が高まり朝の登校状況がかなりよくなってきたが、まだまだ心配な登校班がある。 ・防犯ボランティア、警察署、交通指導員等との連携を強化したことで、児童の登下校の安全確保につながることができた。 ・2ヶ月に1度「運転チェックシート」による自己評価を行い、集計して提示することで、職員のコンプライアンス意識の醸成につながった。 ・保護者アンケート「安全面への配慮」87.5%	・対処療法的にならぬよう、登下校の様子や学校生活の問題点について職員全体で把握し、全体で歩調を揃えて指導していく必要がある。状況把握等のために、各家庭や地域、防犯ボランティアの一層の協力を得なければならぬ。 ・職員のコンプライアンス意識の向上を図るために、参加型・体験型のミニ研修会を行う。例えば、ハツとした場面の経験等を話し合ったり、不祥事防止の方策を出し合ったりするなど、全職員が主体的に取り組む研修の推進を図る。

② 進んで学習に取り組み、課題を解決する子どもの育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	○教職員の資質向上	・教職員の意識改革及び職員研修、授業研究の充実	・研究授業を全学年1回以上行い、授業力の向上を目指す。 ・学年及び学年グループの交流を促進し、効果的な指導方法を共有できる場を月1回以上設定する。	・授業研究会では講師を招聘し、授業論、指導方法、指導技術等の指導力を向上させる。 ・第1水曜日の学級経営会議を中心に交流を活発にする。 ・校内研究主任を中心にして、学力向上コーディネーターともタイアップしながら、各担任とともに分かる授業づくりを行う。	B	・授業研究会は、全学年で実施することができた。講師を招き、指導力向上につながる研修会も設けることができた。研修会が即、指導技術につながったという点では課題が残る。 ・学級経営会議は、会議のメンバーが工夫され、様々な意見が出された。中には、指導に反映することができたものもあって、活発な交流が実践につながった。 ・算数科においては、指導法改善担当と、他教科においては各学年の担任どうしの話し合いがよくなされており、分かる授業づくりに向けての努力が見られた。 ・校内研究においては、全校で同じ目標を達成するための実践に関して、話し合いや共通理解の時間が十分ではなかった。全職員で行うという意識を高める組織作りが必要である。 ・保護者アンケート「わかりやすい授業の工夫」85%	・授業研究会において講師から学んだことを随時振り返ったり、実践につなげたりするような工夫が必要である(チェックシートや実践につなげたいことを掲示するなど)。 ・学級経営会議は、話し合いが活性化するため、本年度のように様々な年齢層や学年との交流の場を設定する。 ・学力向上と校内研究を同一課題と捉え、学力向上を軸とした研究推進ができるよう、学力向上コーディネーターや研究主任、指導法改善担当がチームで研究を推進する組織体制作りを行う。また、研究推進委員会も定期的に開催し、組織活用を図る。
教育活動	●学力の向上	・基礎的、基本的学力の育成 ・国語科や算数科における指導方法の改善による思考力・表現力の向上 ・家庭学習、自主学習の充実	・県学習状況調査12月調査の全教科で県平均を上回る(4～6年)。 ・国語科において書く活動を進める授業づくりに努め、それを他教科にも広げる。 ・家庭学習や自主学習は学年目標を設定し達成する。 ・家庭協力の促進と意欲のある児童の伸長を図る。	・TTを核とし、児童を主体においた楽しく分かる授業を工夫する。 ・朝の「かくぞう・やるぞうタイム」や宿題、学期末のフェスタで基礎的事項の定着を図る。 ・校内研修で指導力の向上を目指す。 ・全校共通の学習規律を確立させ学習環境を整える。 ・国語や算数で「自力解決力」表現するための「かく力」を育成する指導を行う。 ・学力向上たよりやアンケートで家庭への啓発を行う。 ・日本語検定、算数検定を導入し、その定着を図る。	C	・学習状況調査12月調査では、国語科と社会科は3学年とも県平均を上回ることができたが、算数科においては全学年下回る結果となった。特に「考え方」に課題が見られる。 ・各種調査やテストの分析結果から得られた課題に応じて、TTや少人数を取り入れた朝の時間や学期末のフェスタで補充・強化したりした。2学期の単元テストは、1学期より正答率が向上した学級が多く見られ、基礎基本の定着につながった。 ・国語を中心に「かく活動」を取り入れた活動がどの教科でも行われ、自分の考えを表現しようとする児童が増えている。 ・家庭学習、自主学習に関しては、取り組んでいる内容の改善が必要である。 ・児童アンケート「家庭学習への取組」83% ・保護者アンケート「学力向上」85%	・学力向上プロジェクトを中心に、学習規律を確立させ、学習環境を整えるための手立てを具体的に考える必要がある。学級だけに任せるのではなく、学年で、または学校全体で児童を見るという組織作りを行う。 ・算数科指導については、教科書やドリルで問題を解くだけでなく、生活場面に置き換えた自作問題を取り上げるなどして、学習したことが日常で使える意識を高め、問題を解く必要性をもたせる。 ・学力向上のためには、心の安定が欠かせない。登校後の児童の様子の変化を即対応できるように、朝の時間設定を工夫する。 ・家庭学習や自主学習の内容に関しては、自学メニューをデータベース化して活用したり、学力向上たよりで自主学習について紹介したりするなどして、児童の意欲を喚起する環境作りを行う。
教育活動	◎教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	・ICT利活用教育について教職員のスキルアップ	・ICT機器を活用した授業実践を授業時数の30%以上にする。 ・授業中にICTを活用して指導する教職員の能力を高め、ややできるレベルまで高める。	・校内研修でICT利活用についてスキルアップの研修を実施するとともに、研究授業の中でも積極的にICTを取り入れた授業を提案する。 ・情報教育推進リーダーを中心に、ICT利活用の研修会に参加し、得た情報を他の職員に伝達する。	B	・校内研修でプログラミング学習についての研修を行い、情報を共有することができた。しかし、授業実践化についてはまだ難しいところである。今年度中に来年度からのプログラミング学習の年間計画を作成する必要がある。 ・各教室に設置してある電子黒板については、全クラスの授業で利活用できている。タブレットが設置されているが、教室棟にWiFi環境が整っていないため、タブレットの効果的な活用が十分にできていない。	・プログラミング学習については、プログラミング的思考を育むための授業づくりについて年度初めに全職員で研修する必要がある。また、同時に、情報モラル教育についても全職員が指導できる力を身に付ける必要がある。 ・教室等にWiFi環境が整うと、タブレットを効果的に活用した授業づくりの実践を積むことができる。まずは環境を整えて欲しい。
教育活動	○読書指導	・やさしい心を育てるための家庭読書・読書習慣の形成	・年間読書冊数を下学年100冊以上、上学年80冊以上にする。また、50冊以下を15%以下にする。 ・家族での読書を推進する。	・朝の読書タイムを充実させる。 ・読み聞かせボランティア「はばたきの会」と職員が連携し、読み聞かせを実施する。 ・本とブックバッグ、読書ノートを準備し、1～3年生の家庭でファミリー読書に取り組んでもらう。	B	・年間読書冊数50冊以下を15%にするという目標は達成できた。しかし、読書をするこじない子の差が大きい。 ・「はばたきの会」の読み聞かせは子どもたちも非常に楽しみにし、充実した時間を過ごすことができた。 ・ファミリー読書も各学級で取り組むことができていた。回覧の速さには、各学級でばらつきが見られる。 ・保護者アンケート「読書の推進」85%	・図書館や読書活動に誘う工夫(声かけや読み語りの時間の設定など)を教師自身がする必要があるので。特に、読書50冊以下の児童への声かけや具体的な取り組みを講じる。 ・ファミリー読書に関しては、学力向上プロジェクト部員が連絡会等で啓発を行う。

③ みんなと仲よくし、お互いを思いやる子どもの育成							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	・思いやりの心と優しい言動ができる児童の育成	・命や人権について考える日を設定し、人権意識の育成を目指した取組を行う。 ・保護者アンケート「学校は、心の教育や命の大切などを熱心に指導している」において85%以上を目指す。	・「平和を考える習慣」「人権週間」を設け、全クラスで命や人権に関する授業を行う。 ・授業参観日に、保護者にも一緒に考えてもらう「ふれあい道徳」を実施し、家庭や地域と連携を図る。 ・異学年交流やボランティア活動の実践。	B	・命や人権に関する授業に全校で取り組むことができた。参観日にふれあい道徳や人権授業を行い、保護者にも一緒に考えてもらう機会をもうことができた。 ・縦割り班でのボランティア活動を実施して、校外や学校周辺のゴミ拾いを行った。計画通りに実施できたが、子どもの心に浸透させることは継続が必要である。 ・保護者アンケート「心の教育・命の大切さ指導」85%	・人権集会の時期は様々な行事と重なり、忙しい中での取組となるため、実施時期や内容を検討していく。 ・「やさしさの木」の取組を児童に紹介し、友達がおもつ優しさや思いやりに気づかせる。 ・来年度も人権週間の中で全学級で同一資料による授業を実施し、人権意識を高めていく。
教育活動	●いじめ問題への対応	・いじめを見逃さない組織体制強化 ・「いごちの良い学級づくり」に取り組むことによる教育の推進	・年に3回以上学級経営会議を開き、グループ学年の連携を強化することで、学級経営力の向上を図る。 ・「自分がされて嫌なことや言われて嫌なことを友達にしたり言ったりしていない」と答える児童85%以上を目指す。	・年に2回教育相談週間を設定し、心のアンケートを基に児童全員と担任が面談を行い、人間関係の悩みや困っていることを聞き取る。 ・年に1回Q-Uテストを実施し、その結果を分析し学級集団づくりに生かす。 ・毎週月曜日、放課後の職員連絡会で配慮を要する児童について共通理解を図る。 ・相談箱を設置し、児童の悩みの早期発見に努める。 ・定期的に学級経営会議を開き(5月、6月、夏季休業中、10月、11月)各学級の困っている点を出し合いながら、具体的な支援策を考え実践に移す。	C	・心のアンケートや教育相談週間などの実施により、児童が、日頃の人間関係や悩みについて担任と話し合う機会を設けることができた。 ・Q-Uテストを実施しその結果分析から学級経営に結びつけるための職員研修を行うことができた。 ・学級経営会議では、個々の児童に対する支援の仕方や担任が困っている点について話し合うこともできた。しかし、まだ悩みをかかえている児童がいると思われるので、引き続き職員間での共通理解を図り、児童への見守りや声かけをしていく必要がある。 ・児童アンケート「嫌なことを友達にしたり言ったりしていない」83%	・年2回心のアンケートを実施し、児童の実態の把握に努めると共に、児童が個別に相談できる機会を設ける。 ・悩みや困り感を抱える児童に対しては、複数の職員で共通理解のもと対応に当たると共に、SCやSSWにつないでいく。 ・定期的に学級経営会議を開き、お互いに困っている点を出し合いながら、具体的な支援策を考え実践に移す。 ・Q-Uテストを実施し、その結果をよりよい学級集団づくりに生かせるように職員研修を行う。
教育活動	○生徒指導	・基本的生活習慣の定着	・進んであいさつや元気な返事ができる児童、無言掃除ができる児童、静かな廊下歩行ができる児童80%以上を目指す。	・全校朝会での生活の話で、前月の反省をし、返事や挨拶・無言掃除、静かな廊下歩行等の実践への意識付けを行う。 ・あいさつ運動を行い、自ら気持ちの良いあいさつができるように自主的・自律的な実践意欲を高める。	C	・生活委員会中心から学級回しに切り替えて全校挙げてのあいさつ運動の取組にしたり、掃除終末の振り返りを全校実施したりして、あいさつや「無言掃除」等への意識改革の取組を行った。 ・トイレのスリッパ並べについては、視覚的に結果を掲示したり上手にできている階を紹介したりしてきた。 ・無言掃除やあいさつ、静かな廊下歩行について全校朝会で寸劇を交えた指導をして実践への意識付けを行った結果、望ましい行動が見られるようになってきた。 ・児童アンケート「あいさつ・返事」82% ・児童アンケート「無言掃除」86% ・児童アンケート「トイレのスリッパ並べ」86%	・日ごろのPTA挨拶運動や防犯ボランティア意見交換会、保護者アンケートの結果においても、挨拶は課題である。児童が課題意識をもち、自分たちでより良い方法を考えることができるように、全学級で話し合いの場を設けるようにする。児童が必然性をもち、自主的にできるように促していく。 ・来校者への挨拶を特に重視し、立ち止まり挨拶ができるように指導していく。 ・挨拶指導だけでなく、日ごろの授業においても音声言語指導とからめた視点から「声を出すのは楽しい」と感じさせる指導をしていく。
教育活動	○特別支援教育	・個に応じた指導、支援の充実	・配慮を要する児童を全職員が把握し、情報を共有しながら指導・支援を行う。 ・配慮を要する子どもについて幼稚園・保育園・中学校と連携会議を年間2回以上開催する。	・年4回、特別支援教育に関わる研修会を実施し理解を深める。 ・校内支援委員会を中心に、連絡会や学級経営会議等でも定期的に情報共有の機会を設ける。 ・支援シートを作成し情報を共有できるようにする。 ・専門機関の巡回相談を計画的に実施する。 ・個別の教育支援計画や指導計画の充実を図る。	B	特別支援教育に関わる研修会を実施したことで、配慮を要する児童への個別の支援及び通常の学級のできるUDについて全職員で考えることができた。年度初めに、配慮を要する児童についての情報共有はできた。しかし、継続的な共有や具体的支援については、まだ十分できていない。引き続き指導にあたる中で、具体的支援について探り、支援シートを活用し、次年度に引き継いでいく必要がある。	・年4回、特別支援教育に関する研修会を年間指導計画の中に位置づける(年4回)。 ・定期的に情報交換の場を設定する。連絡会の活用。学級経営会議の中でケース会を行う。 ・外部機関(西部教育事務所・巡回相談・医療・福祉・幼稚園や保育園など)との連携

④ 開かれた学校づくりの推進と地域力の活用							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (左記の理由)	具体的な改善策・向上策
学校運営	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	・文書処理校務サーバーの利活用により各分掌間の連携及び情報共有の強化 ・定時退勤日の取組の推進強化 ・衛生管理の改善、充実	・アンケートで「文書のデータを校務サーバーに保存・整理することができた」と答える職員を90%以上にする。 ・各分掌間の連携及び情報共有を図り、効率的な業務への取組を推進するとともに、教職員の時間外勤務について1か月当たり前年度比5%削減する。	・校務サーバー上で各分掌が情報共有を行いやすいように、フォルダ構成を工夫する。 ・各教職員の勤務時間を確実に把握するとともに、特定の教職員に業務が集中しないようにマネジメントを行う。 ・毎週水曜日の定時退勤日の確実な実施を行い、会議や研究等は退勤時間までに終了する。 ・定時退勤日に不測の残業があれば管理職に申請する。	C	・データを校務サーバーに保存・整理することができた職員は100%であり、校務サーバーでの情報共有やペーパーレス会議、メール発信による回覧等を取り入れたことにより、印刷時間が省け、校務の軽減化や効率化を図ることができた。(用紙の節約にもつながった) ・時間外勤務時間削減の目標達成ができた月は、1か月だけであった。年平均も昨年度より4%増加した。生徒指導対応が主な要因であり、保護者への連絡等も19:00を過ぎることがあった。安定した学級作り、組織としての学級経営支援体制を整える必要がある。	・年度初めにデータ管理の仕方についての研修の時間を設定する。 ・職員会議の時間短縮のためには、協議内容と周知事項を区別し、周知事項についてはボードに表記して周知する。協議内容は時間配分を明確にし、提案者は新規事項や変更点のみを説明する。また、資料は1週間前に職員に提示し、事前に資料に目を通しておくことで、課題や質問を明確にして会議に臨むようにする。 ・時間外勤務削減について、その工夫や取組を全職員で話し合う場を設けることで、定時退勤ができる仕事術を共有し合う。定時退勤日は、退勤時間をボードに明記し、全職員で時間を意識した働き方の改善に取り組む風土の醸成を図る。
学校運営	○開かれた学校づくり	・教育活動等学校の情報を家庭や地域に積極的に提供	・授業参観参加者率70%以上、学級懇談参加者率50%以上を目指す。 ・フリー参観日で地域住民参加者50名以上をめざす。 ・保護者アンケート「学校からの情報発信」「開かれた学校運営」において85%以上を目指す。	・フリー参観日を設定し、幼稚園・保育所、老人クラブ等へ呼びかける。 ・地域ボランティアなど地域の人材活用をさらに推進する。 ・学校便り、学級便り、CS便り、まちcomi等で定期的な発信を行う。	B	・授業参観の保護者参観は80%、学級懇談会の参加が30%で例年並みの数値であった。呼びかけも行ったが、懇談会の参加が少なかった。バザーや運動会等の地域住民の参観は50名以上の参観があった。 ・今年度新たな取組として、家庭科裁縫学習やブライندサッカー教室、防犯ボランティア、特産物生産者を招いた社会科学習、市役所職員を招いた総合的な学習、琴奏者を招いた音楽学習など、全学年において地域人材や企業等を活用した授業を多く取り入れることができた。 ・保護者アンケート「学校からの情報発信」87.5% ・保護者アンケート「開かれた学校づくり」85%	・懇談会の目的・意義を確認し、形態を見直す必要がある。 ・ゲスト・ティーチャーを迎えて実施する学習は、児童の学習意欲をかき立てたり、主体的な学びを促すなどの効果がある。社会に開かれた教育課程を実践していくために、年間指導計画に位置づけ、見直しを持った活用を行っていく。 ・地域人材や企業等の活用については、各学年年間を通して計画的に行うことができるよう、一覧表を作成する。

4 本年度のまとめ・次年度の取組

①学力向上
各種調査結果から、本校児童の実態として、自分で考えて自分で行動するという主体性がやや低いことがわかった。教師の問いに答える受動的な学習から自分で問いを見つけ、解決しようとする主体的な学習への転換を図る必要がある。次年度は、児童の学ぶ意欲が高まる授業づくりを研究し、主体的に学ぶ児童を育てていきたい。

②いじめ防止
「いじめはどのクラスにも起こりうるもの」という意識のもと、高いアンテナを張り、いじめの早期発見・早期対応に努める必要がある。そのためには、児童の安らぎの場となる学級づくりを行い、心に響く道徳授業や学級指導の充実を図る。次年度も、定期的に学級経営会議を開き、組織としての学級経営支援を行ってきたい。

③特別支援教育の充実
特別支援教育コーディネーターを中心に、校内委員会やケース会議等を実施して具体的な支援策を検討することができた。次年度は、さらに組織としての支援体制づくりを強化していく。また、支援を必要とする子どもにとって分かりやすい授業は全ての子どもにとっても分かりやすい授業であることを意識し、通常の学級においても特別支援の視点を生かした環境設定・指導の工夫を行っていく。

④危機管理
今年度は、鹿島高校生や地域との連携による避難訓練を実施することができたため、児童の防災意識を高めることができた。次年度は、児童を取り巻くあらゆるリスクを想定し、危機の未然防止、危機発生時の迅速かつ的確な対応、再発防止など、普段の生活における教職員の危機管理意識や実践力の向上を図る。

●は共通評価項目、○は独自評価項目